

1 新約聖書における先天盲開眼奇跡とモリヌークス問題

溝田 悟士

埼玉福祉保育医療製菓調理専門学校

ヨハネ福音書9:1以下にある先天盲開眼奇跡テキストについて、現代の医療と認知科学の観点から分析を試みる。

まず、二千年前の新約と同じ時代の地中海世界には、すでに白内障に対して墜下法手術をはじめとする有効な治療法がすでに地中海世界で発展していたことを述べる (Celsus, *De Medicina* 6:6)。

一方で、新約聖書の中には白内障とその後の治療に関連する可能性がある箇所が複数あることを指摘する (使徒9:11a, マタイ7:5など)。その中でも、ヨハネ9:1以下の先天盲開眼奇跡は、生前から盲目であったとする非常に特殊な前提に基づく内容である。ヨハネ福音書と同時代人のケルススは、乳児期からの盲目の治療は無駄であると述べており (*De Medicina* 7:7)、治療「放棄」が当時の先天盲に対する共通認識であったことが分かる。その治療放棄の共通認識に対して、ヨハネ福音書の著者は批判を加えている可能性がある。つまり、ヨハネ福音書は、薬物・手術などの治療法で万全なものがありさえすれば先天盲人でも晴眼になる可能性があることを主張しているように解釈できる。

さらにヨハネ福音書は、イエスに盲人を「シロアムの池」まであえて歩くように明示させていることから、盲人本人の意志によって自ら積極的にリハビリテーションを行わなければ晴眼とはならない、と考えられる。そして、このリハビリテーションの必要性を通して、医療者の「全能性」に疑問を呈し、「全能のパラドクス」を通し医療者の限界と、患者の自由意志の重要性を読者に訴えてもいる、と分析する。

全能性のパラドクスとは、「全能者は彼が後にコントロールできなくなるようなものを作るだろうか？」(三宅2006)などを問う論理学上の問題である。本研究では、ヨハネ福音書の当該箇所は、最終的な治療者が「全能の神」であり、かつ「人間の創造者」であるからこそ人間に自由意志を与えていること、従って、神は神自身が与えた患者の自由意志に反することを神自身がなすことはしないし、人間の側の意思の有無によって癒されるかそうでないかも決まる、ということを実証している個所だと結論付けた。この「仮説的な全能の治療者」の属性は個々の医療者にも論理的必然性として当てはまるため、医療者は全能ではなく限界を持った存在という自覚をもって症例にかかわらなければならない、という倫理が提起されているように思われる。

またさらに、このヨハネ福音書の箇所は、晴眼になった盲人がイエスのことを知らないといっていることから、たとえ晴眼となっても盲目であった時に知った人物の顔の判別を視覚によってはできないなどの問題をも提出している。これは、ロックとモリヌークスに始まる、開眼手術直後に「奥行きを知覚」できるかという認識論的問題である「モリヌークス問題」(Locke 1689; 鳥居1982)と同じ科学的認識論を、二千年前に先駆けて唱えていると考える。つまり、ヨハネ福音書の著者にとって、「論理的」かつ「最終的」な治療者は神であり、医師をはじめとする「医療者全能主義」への皮肉である、ととも解し得る。

今後は『法華経』、『トビト記』にある類似の物語の再解釈、また使徒行伝3:2, 14:8にある「生まれつき」の先天性の肢体不自由者の癒しの神経学的再解釈などが残された課題であり、今後とも研究を続けていく。